
勇者と姫のショートストーリー ザ 異世界

水色ペンキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と姫のショートストーリー ザ 異世界

【著者名】

ZZコード

ZZ663F

【作者名】

水色ペンキ

【あらすじ】

夏休みのはじめに新しいケータイを手に入れた少年は、不意にかかつてきた不思議なコールで、知らないうちに異世界の姫を助けてしまう。姫は少年を勇者と見なし、魔法の力で彼女の国へと連れていく。そこでは激しい階級闘争が繰り広げられていた。だが少年は、勇者として姫のもとに留まることを拒否した。ある夜、姫の力が衰弱した隙に、敵が彼女に襲いかかる。少年はそれを察知し、姫を助けに駆けつける。

俺の名は辺鄙寺吾郎。『へんぴじ じひり』だ。デラへんぴと呼んでくれ。さて、今年中一になつた俺は、なんと異世界に行つてきたんだ。異世界よ異世界。スゲエだろ。こんな話をすると大抵のやつは俺のことを変な目で見る。だが上等だ。聞く耳をもたねえ奴は聞かなくたつていい。どうせ信用しねえだらうからな。

夏休みの初日にケータイを変えたのがすべての始まりだ。ひと夏のアヴァンギヤルド？ アヴァンチユール？ を求めて、カッコいケータイをチラチラさせながらカントリー・ロードをローリングする以外、こんなド田舎じややることがねえんだ。ここがどこかつて？ チタ半島さ。何県かつて？ フィロソフィー県だよ。何も知らねえんだな、お前。

新しいケータイは真っ赤でね、なんとアンテナが一本も付いてたんだ。しかも長えの。尻ポケに入れてチャリで走ると風になびいてふーわふわよ。こんな奴、このへんじや俺以外に見かけねえはずだ。このケータイ、二つ折りの下半分が蛇腹になつて、なんか丸っこくもできたりする。メーカーはわからねえけど、とにかくンパネエケータイさ。

そのケータイを買って一日目、最初にかかつてきた電話が妙だつた。なんかね、いきなり電話口で『助けて！ 助けて！』って言いやがんの。何これ新手の振り込め詐欺、て思つたけど声は若い女だし、つても俺より年上だらうけどさ、まあちよろつと騙されてやろうかと思って相手したら、『駅前に来て！ 駅前に来て！』だつて。どこの駅だよ。俺がどこにいるか知つてんのかよ。

でカミノマつて駅に行つたんだ。うちから一番近い駅なのな。そしたら次は『そこで立ち止まって！ そこで立ち止まって！』だつてよ、何だそりや。しかも道路の真ん中だ。でこつからがビックリ

さ。立ち止まつたらパパーってトラックが突っ込んで来やがんの。オイオイオイオイ殺す氣かよつてとつさに逃げたけど、運ちゃん、俺をよけようと道端の小料理屋みたいなのに突っ込んだ。ギリギリ店にめり込みはしなかつたけど、店の前のイケスがぶつ壊れて、そこら一帯水浸しだ。逃げたね。ソッコー逃げた。ケータイにかかつてきた変な通話はそれつきりだよ。

その晩変なことが起こったんだ。夜中目が覚めたらなんか生臭い匂いがすんの。なんだこりやと思つて電気の紐を引っ張つたら、パチン、明るくなつた部屋の真ん中に、でつかいザリガニがいるんだよ。でつかいつてそุดな50センチくらいかな、まあとにかくありえないデカさだ。啞然としたね、啞然と。

ザリガニの奴、明かりがついたのに気づくと、俺のほうに向き直つた。でハサミをぐーっと伸ばして、床まで垂れてる電気の紐を挟むとな、勝手に電気を消しやがつた。パチン。

幻だ！ ってか夢だ！ それ以外にありえねえ！ そう思つてしばらくボーゼンとしてたんだが、やっぱ気になるよな。気にならねえハズねえよな。で、もつかい電気をつけてみた。パチン。ザリガニさんこんにちは。パチン。また勝手に消される。なんだよ一体これ。

「何お前ザリガニなの？ なんで俺の部屋にいんの？ オモチャか何かなの？」

自分でも何言つてるかわからなかつたけど、とにかく俺は言つたのね。そしたらこいつ、答えやがつた。

「恥ずかしいわ、こんな恰好で……」

「いや恥ずかしくねえよ。ザリガニだろお前」

「伊勢エビよ」

「だからなんなんだよ。一緒にだよ。」

「で、伊勢エビさんが何の用だよ。どうから入つてきたんだよ。臭えよお前」

「水から出ると、匂うの」

「そりや水の中じゃ匂わないだろナジドロ」

「そんなこともないけど……」

「何会話してんだ俺。」

「で、何の用なの。俺眠いんだよ。夢の世界に帰ってくれる？ マジで」

「あなたの力が必要なの」

「何言つてんのコイツ。部屋の中に沈黙が降りたね、マジで。」

「ハア？」

「人間の勇者の力が必要なの。わたしたちの国を守るために」「どこだよザリガニの国つて」伊勢エビだったが、素で間違った。そしたら「海の底よ！ とにかく来て！」てエビが叫んだ。そしていきなりジャンプした気配がしたんだ。次の瞬間、俺の顔に何かが、つてかエビしかねえけど、冷たくてトゲトゲした何かが掴みつかつた。ヤベエ！ 殺される！ リプリー！ 思うまもなく、なんか泡泡しいブクブクが俺の顔中に吹き付けられて、あつという間に意識が飛んじまつた。

目を覚ますと、俺は見知らぬ宮殿みたいなところにいた。

「気がついた？ 亂暴にしてゴメンね」

横を見ると、あのでっかいエビがいる。触覚をふわふわさせて、飛び出た黒い目がクリクリしながら俺を見ている。ああもう殺してえ。一体何だよコイツもココも。」

「おい、どこだよこい」

「西セントレア市、竜宮センターよ」

「西セントレアってどこだよ」

「人間の作った空港の西側よ」

「おいおい馬鹿にすんな。地理の点は悪いけど、俺だつて底なしのマヌケじやねえ。」

「空港の西には海しかねえだろ。それともこいは対岸か？」

「うじはねぶるぶると首を振る。

「三重県じゃないわ。ここはあなたの言つどおり、海よ。海の底なの。海の底には、あなたの知らない世界があるのよ。西セントレア市は海底にある、金田一族の城塞都市なの」

「ちょっと待てよ。理解できねえよ。

「つてことは何だよ、俺は海の底に連れてこられたってことか？」

浦島太郎みたいに

「そうよ。意外と驚かないのね」

いや驚いてるけどさあ。

「まあ……そういう年頃だしな」

呟いたら、お互になんとなく納得した。

「で、どうして俺をここへ？」

「あなたは選ばれた勇者だからよ。一族の長だつた私は人間に囚われ、もう何時間もしないうちに殺されるはずだつた。でも伝説のエビ電話を手に入れたあなたが、私の電波を受信して救い出してくれたの」

「電波つて……」

「今日の昼あなたが見たイケスの中には、私がいたのよ。私はあのあとドブ川に逃げ込んで、そのまま海に戻つてきたの。東京や名古屋まで出荷されてなくて運がよかつた。ここでは族長のマル秘魔法が使えるから、それであなたを探して連れてきたつてわけ」

「……魔法つて何だよ」

「説明できない力のことよ」

つてなわけで、俺は異世界、つてか伊勢湾の底に連れてこられちまつたんだ。驚くなよ、この伊勢エビ、金田一族のお姫様だそうだ。俺は竜宮センターの大ホールに案内されて、美味そうな膳を出された。伝説のとおり、舞台の上は鯛やヒラメの舞い踊りだ。その膳を紹介しよう。まずはお造りの盛り合わせだ。その隣に鰯のたたき。サバの酢締め。ほつけの開き。塩ジャケ。サンマ一夜干し。浅利の

吸い物。昆布巻き。めかぶ。ひじき。わかめ。ヒトセトウ。……。

「米はないの？ せめて寿司とか」俺は給仕のでつかいサザエに訊いたね。

「お米はありません。海のものではないですか？」

「醤油もないみたいだけど」

「海のものですか？」

「酢はあるのかよ」

「代用品で賄つてます」

特に珍味というわけでもねーし、こんな塩辛いオカズばかり出されても困るよな。味付けに難があるなら、せめて素材くらい何とかしろっての。俺はサザエに注文をつけた。当然だろ？

「もつといいものないの。それこそ伊勢エビとか、本マグロとか、アワビとかさあ」「アエエッ」サザエは驚いた声を上げた。

「姫様のお客人が、そんなものを食べたがるなんて、そんな」

「驚くようなことかよ。なるべくイイモン食いたいってのが人情じやないか。俺、勇者よ？」

「まさか、このわたくしもそのような目で見ていらっしゃるのですか」

「うん」

サザエは全速力で逃げていった。そして入れ替わりにヒビ姫がやつてきた。

「サザエをいじめなさつたんですね。いけないわ、そんなの。私たち、精一杯のおもてなしをしているのに」

ヒビ姫はなんか申し訳なさそうに言いやがる。申し訳ないとと思うなら、連れてきたことをそう思えよな。で、大きな鍔を床に置いて、なんとなく控えめなポーズを取つてんの。当然表情なんかはわからねえ。

「姫ちゃんさあ、鯛もヒラメもいるつてのに、なんでこんなありき

たりのモノを出すわけ？」

「出されたものに堂々と文句を言つなんて、スゴい躾ね……。いいわ教えてあげる。鯛やヒラメ、サザエたちは、私と同じ金皿の一族なの。だからあなたにお出しすることはできないわ」

「なんだよ、その金皿一族つて」

「新しい海の支配階級よ。あなたにお出ししているのは下位の皿たち、紫皿、赤皿、白皿、緑皿族のものたちの死骸」

「……回る寿司かよ」

「じ」明察。かつて海の中にはシャチを頂点とする食物連鎖のヒエラルキーがあったの。現在の金皿一族に属する私たちは、その中では決して高い位置にはいなかつたわ。でもあるとき、私たちに啓示が下された。蟹が見つけた瓶の中に、回転寿司屋のチラシが入つていたのよ。その中では、私たちは食物の回転サイクルの頂点にいた「値段は頂点だらうけど、回転は意味ちがくね？」

「何でもいいのよ。私たち金のお皿の海産物は、チラシを見て争いをやめ、同盟を結んだの。そして下位の皿の生きものたちを支配下に置いて、新しい海の秩序を建設しようとしたのよ」

「……」ありえねえよ、そんなの。

「でも問題があつたわ」

「どんなん？」

「金皿一族がどんなに団結しても、旧来の食物連鎖のピラミッド構造は崩れなかつたのよ。私たちの闘争は無意味だつた」

「そりやま、そりやま」

「私たちはいま、タコやウツボからひつきりなしに攻撃を受けているわ。そこで、食物連鎖の頂点に近い生物を仲間に入れることで、戦力を増強しようということになつたの」

「何となくわかつてきた。でもぶっちゃけ、わかりたくねえ。

「……それが俺だつたつてわけか」

「そう。魔法で作ったエビ携帯を世に放つて、私たちを救うにふさわしい人間を捜し求めたの。私たちの要求レベルにぴつたりと合致

したのが、あなたよ。妄想力、適応力、細かいところに目を瞑る寛容さ、そういう素質を高いレベルで兼ね備えているのが、あなた。あなたは地上なんかにいるよりも、伊勢湾の底が似合っている人間なの。セレブレイテッドなアーレント

そう呟つと、エビ姫はいきなり大きくのけぞつた。両の鍔を持ち上げて、バンザイのような恰好をする。持ち上げられた顔の下で、門扉のような口がぱくぱくしている。俺はちょっとだけビビつた。姫はこの威嚇的なポーズのまま、かつてないほど大きな声で叫んだ。「辺鄙寺吾郎、私たちを救うために、あなたはずつとここにいるべきだわ！」

俺は生まれてこの方味わったことがないくらい憂鬱な気分になつたね、マジで。

「断る」

精一杯低い声で答えると、ハサミが「」とつと床に落ちた。

「……どうして……？」

「どうしてって言われても「」なあ。

「わかつたわ。私、いつまでも待つ」触覚も垂れる。しおらしいもんだが、俺にとつてはどおでもいいことだ。

「今すぐ地上に帰してくれ。魚ばつかり食つてられな」し

そう言つたら姫の野郎、身を乗り出してさ、「」とつしたハサミ

で俺の袖にすがりやがつた。

「せめて、せめて3日だけここにいて頂戴。お礼はするから。お願

い」

「お願いされてもなあ……神隠しとか言われそうだし、玉手箱とかいらんし」

「吾郎さんのお母様にはメールを打つておくわ。吾郎さんは今、伊勢湾の底にいますつて」

「それはやめてくれ」

「お願い。3日だけでいいから

俺は考えたね。」そのままここで魚食つてもしょーがない。さつさと陸に帰つてサーサマーヴィケイションを満喫したい。エビの恩返しが海底幽閉と強制徴兵だなんて、ひどい待遇じやねえか。いや、待てよ。

「人魚とかいないのかよ。人魚がいれば、ちょっと考える」エビは戸惑つた様子を見せた。いや、なんとなくだけどさ。

「いないわ。似たようなのならいるけど」

「半魚人は勘弁だぜ」

「人面魚……」

「それもダメだ。使えねえなあ」

ホント使えねえ。ぶつ飛んだ魔法を使う連中なら、それくらいのサービス用意しとけよ。

「キメラが好きなら、東シナ海まで行かないと無理よ。あ、半分だけ人間つてのがいいのなら、半分だけ残つた人間ならどこかに……」

「そういうものを俺に見せないでくれ」

エビはうなだれた。俺もかなり、残念な気持ちだ。

「難しい注文ね。ご期待に添えなくてごめんなさい。でも、3日だけ留まつてくれたら、ちゃんとお礼はするわ。地上にも帰してあげる」

俺はさつきから考えていた疑問を口にした。

「何で3日なんだ？」

「……明日から私の脱皮が始まるの。甲羅が硬く戻るまで、私の力は半減するわ。今やつと見つけた勇者を失つて、族長の力も弱まれば、金皿一族はたぶん崩壊してしまう。あなたの勇姿を見るだけで、一族の結束は強まるのよ。逆にいふと、いまの金皿族はそれくらいギリギリの状態にあるの」

なるほどなあ。さすがの俺も、なんだか可哀想になつてきたよ。で、聞いた。

「……お礼つて何だよ」

「財宝をあげるわ。私たちが見つけた沈没船のお宝とか」

「乗った」乗ったね。今年の夏は、バイトしなくて済むかも。

それから俺は富殿、じゃなかつた、竜富センターの中をぶらぶらして回つた。センターは民宿みてえな作りの味気ない建物で、なぜか人間が使うのになょうどいいサイズなんだよ。不思議だね。廊下では泳ぐ魚たちとすれ違つた。そういえば俺、気づかず空気の中に入りみたいに行動してたけど、魚たちは水の中にいるみたいに浮いてんだよな。どういう仕組みなんだかね。で、晩飯を食つて貸し切りの浴場でひと泳ぎして、六畳の座敷に案内された。床の間には綺麗なサンゴが飾つてあって、大きな魚拓の掛け軸がかかっている。案内役のヒラメが、浴衣を出したりとかそういうことをしてくれた。茶も出してくれた。

「こふ茶でござります」

「なあ、テレビとかねえの」塩辛いお茶を啜りながら聞いてみたんだ。

……

「つまんねえ土地だな」

「申し訳ございません。あ、なんでしたらアワビを呼んできましょうか。聞くところによると、人間の殿方は……」

「いや、晩飯のとき以外、本物に用はないから」

やることがないんで、すぐに寝たさ。蛍光灯を消すと、海の中はマジで真っ暗だ。ふかふかの蒲団だけが暖けえ。で、耳を澄ますと、それまであまり気にならなかつた水の音が、「じぼじぼ」と俺を取り巻き始めた。ああ、海底にいるんだな……そう思つたよ。なんつーか、心地いい音。

夜中に何かを聞いて目を覚ました。あたりは恐ろしいほど真っ暗だ。

「あ……すけ……」

何だ？俺は慎重に体を起こした。するとね、突然平衡感覚が狂つたんだ。どつちが上だか分からねえ。しかもさつときはなかつた水の抵抗がある。腕を動かすと、『』ぼつて重い音がした。マジでパニクリそうになつたよ。なるだろ普通？

俺は落ちつこつとして目を瞑り、掛け蒲団の表面を握りしめた。尻の下には敷き布団の感触があつて、その下には畳の硬さがあつて、そうやつて意識を集中させていくと、ふと平衡感覚が戻ってきた。やるな、俺。

俺はゆつくりと蒲団を抜け出し立ち上がり、蛍光灯の紐を探した。すぐ見つかって、引っ張った。コーン。

瞼の向こうに赤い光が広がつた途端、水がどつと沸き返つたんだ。魚だ！ 無数の気配が沸き起こつて、俺の横を、頭上を、顔の前を掠めて、ものすごい勢いで泳ぎ去つていつた。俺はビビッて尻餅ついた。目を開けるのが怖ええ。掛け布団の一部がぶるぶると震えて、小さな魚が逃げ出していくのが見ないでもわかつた。これ全部、ほんの2・3秒で起こつたんだぜ。信じられる？ で、パタンてフスマを閉める音が響いて、あとはシーン、静寂だ。

俺は恐る恐る目を開いて、明るくなつた座敷を見てゾッとしたんだ。

調度の類はさつこままでと変わつてねえ。でも水があつた。座敷全体が海水の中に沈んでて、さっきの魚が搔き回したんだろうな、垢みたいなふわふわしたゴミが舞い上がつている。次の瞬間、呼吸したらヤバいんじゃないかと思つて息を止めた。だがすぐに気づいたよ。起きてからしばらく普通に呼吸してたんだから、多分まだ息はできるんだろうつてわ。実際できた。ひと安心だ。

「すけ……て……」

俺はハツとした。小さな声。そうだ、俺はこれを聞いて目を覚ましたんだつた。俺は座敷を横切つて、廊下のフスマに手を掛けた。

そこでちょっと躊躇つたね。フスマを開けると、そこでなにかが待ちかまえているような気がしたんだよ。ありそだろ、そういうの。

「た……」

でもそこに突つ立つても仕様がねえ。俺は勇気を振り絞つて、フスマを開けた。ら、なにもいなかつた。部屋の中と同じく、ちつこいゴミがふかふか漂つてただけだ。

「…………け…………」

大ホールのほうだ。俺は明かりを抜け出すと、暗い廊下をそろそろ歩き始めた。どつかに電気のスイッチがあれば点けようと思つたけど、生憎なかつた。

「じぼつ。そういう音がするたんびに、廊下の隅つこで何かが動いた。で、必ず黒い影んなつて逃げ出していくのな。どうしてこいつ、魚つてのは臆病なんだよ。

手探りでいくつか角を曲がつた。そしたら、突き当たりの戸口に、四角いホールの明かりが見えた。

「…………ご……ちや……け…………て」

まっすぐにそちらへ進んだ。そしたら突然、戸口の形をした明かりん中を、ちつこい影が横切つたんだ。ものすごい速さだった。んん？ って思つた。で、一瞬遅れて、さつきの影よりかなーりでかい何かが、もう少し高い位置を通りて、明かりの中を横切つてつたんだよ。何だろね？

俺は明かりに向かつて、もう数歩進んだ。

そしたら今度は、ホールの向こうの壁際を、逆方向に、さつきの影たちが横切つた。今度はわかつた。小さい方の影は、エビ姫だ。何かに追われているらしい。俺はぱつと駆け出した。

「…………ろ……ちや……あ……たあ……すう……けえ……てえ……」

姫の奴、情けない声で叫んでいた。叫びながら、ラジコンカーみたいな速度でホールの中を走り回つてんの。それも後ろ向きで。エビの動きとは思えないスピードだよ。それを追つかけて、噛み終わつたガムみたいな固まり、つてかタコだ、茶色くて巨大でとにかく

おぞましいタコが、俺の胸ぐらごの高さを猛スピードで泳ぎ回っている。

「し……ぬ……う……」

俺は唖然とした。姫はホールのなかをめりめりめりめりに逃げ回っている。エビヒタコ、まるで風船をくくつづけられた鼠みたいだったよ。

「何してんだ、お前」

「あ……こお……があ……」

「何なのそのスピード」

「ま……ほ……う……よお……」

と、会話したのがヤバかっただのか、このアホ壁にぶつかってひっくり返った。途端にタコが襲いかかった。俺は慌てたね。なんか俺が殺したみたいになつたら嫌じゃね？ で、人間様のパワーで二匹の間に割り込もうとした。と思つたらさ、タコ足の間から、姫がするりと飛びだしたんだよ。なに俺無駄な努力？ 空回り？ と思つたけどそーでもなかつた。タコがぎょろりとこちらを見た。マジキモ。姫はそそくさと俺の後ろに隠れた。タコはとにかく悠然としてる。ふと見たら、タコの野郎、脚先に伊勢エビのハサミを抱えてやがんだ。俺はあれつと思つて姫を見た。片腕がなくなつてたよ。

「お前、大丈夫か」

ちょっとビビりて聞いたんだけど、エビ姫はやたらと落ちついてたよ。

「こぞとなればハサミは外せるのよ。次の脱皮で復活するわ。ああ、もうダメかと思った。来てくれて嬉しいわ」

「そうかい。で、あいつは何だ？」

「侵入者よ。縁皿の一族ね」

「敵つてことか。この宮殿、つてかセンターには、お前を守る兵士とかいないの？」

「あなたがいるじゃない」

「俺だけかよ。他の奴らはどうしたんだ？」

「逃げたわ。言つたでしょ、金皿一族の結束は風前のともし火なんだつて。あたしが脱皮してもあなたがいてくれたら大丈夫だと思ってたけど、そこに敵が現れたらやつぱり限界を超えちゃつたみたい」

「情けねえ話だよなー。」

「つてことは、もう金皿族はだめつてことか」

「そうね。でもそんなことより当面の敵よ。さあ、襲つてくるわよ！」

俺が目を上げると、タコが脚を広げながら俺に向かつて飛びかかって、つてか泳ぎかかつてきた。思ったよりデカイ。真ん中にまつ黒いカラストンビが口を開けて、なんていうか殺る気満々のていだつた。俺は咄嗟に両腕を上げ、顔面を守ろうとしたね。基本のガード。

ところが腕があがらねえ。重いんだよ。そして目を落としてビックリ、両腕が赤黒くて巨大ななんかに覆われてんだ。超でっかいキヤツチャーミットみたいな感じになつてた。

「気をつけて！ 油断すると危険よ！」

ハツとして見上げたら、タコが目前まで迫つてた。俺は後ろに腰を落として、その反動でなんとか腕を振り上げた。タコが腕にからみついて来やがつた。

だがタコよりミットだ。よく見ると、俺の両腕は、カーバサミになつていた。

「え、おい、何だこれ！」

「何でしじう」混乱してゐ俺に、姫が答えた。ぶつきりぱつ。

「何でつて、うで、うで！」

「予想外の変化ね。ずっと人間でいてくれると思ったんだけど。やつぱり魔法はわからないわあ」

「わからないじゃねえよ。どうすんだよこれ」

そんな会話をしながら床を転げる俺の腕に、タコの吸盤がしつかりと食いついたのがわかつた。殻の上からだから、別に痛みはない。

それはいいが、タコの野郎、半分くらいの脚を俺の腕に固定したまま、上腕伝いに俺のほうへと登つてきやがったんだ。

「ちょ、待てって、」俺は焦った。すると俺の眼前で、突然まつ黒な雲が広がった。スミ、タコスミだ。振り払おうにも、腕は固定されて動かねえ。マジでヤバい状況。

「おい！ 伊勢エビ！ 助けろつて！」

言つてゐるうちにスミはどんどん濃くなつて、ほとんどなにも見えなくなつた。海水の搖らぎが微かに濃淡になつてわかるとか、その程度だ。俺はむせた。咳き込んだ。と、急にあたりの闇が深くなつた。

そして、暗闇の中央に、見たこともない外人の男女の顔が浮かび上がつたんだ。

「ハイ、ゴロー、元氣？ 夏休みも始まつたつてのにツイでないわね」これは女。年はおそらく三十過ぎかな。アメリカ人っぽい白人で、セミロングのコワい金髪に、えくぼの深い顔をしている。生ける化粧台みたいだつたよ。

「エミー、そういうつてやるなよ。人生わからぬもんさ。見知らぬ土地で英雄として死んでいくのも悪くないよ」男はメスチーノ風だ。四十代かな。黒っぽい髪にわざとらしい笑顔、便所でジャズを口ずさんでいそうな風体だ。

「いいじゃないカルロス。どうひいき日に見てもろくな夢じやないわよ、こんなの」

夢かよ。夢なのかよ。

「男の子の夢つてのはワンパターンだよな。そう都合よく勇者になんかなるわけがない。お前、今までなんの努力をしてきた？ してないだろ？ エビの姫様のために死ねるかい？ 死ねないだろ？」

「器を知れ、器を」

「カルロス……あなた、ひどいわ」

「誰にだつて覚えがあるのさ。甘酸っぱい少年の妄想だよ。だが世

界つて奴は、空想ほど味わい深くできちやあいない。現実を見ないとな、少年」

現実かよ。やっぱ現実なのかよ。

「嫌な思いをさせずに死なせてあげればいいのに。ただでさえファーストキスもせずに死ぬとか、かなり悲惨な人生の閉じ方をしようとしてるのよ、この子」

「Hリー、この年頃なら珍しくはないよ。安心しろ少年」「そつかしらね。あたしのこころは……。あ、電話よ、電話」

ブルルツ、ブルルツ……

「はい、Hリーよ。あら。本当？ よかつた。あたしたちも氣の毒だつたのよ。本当によかつた」

なんなんだよ！ 一体！

「どうした？ Hリー」

「死神からお知らせ。スケジューるがたて込んでるから、このまま抵抗をやめれば、この少年の命は取らないって」

「おお、よかつたじやないか少年！ めでとつ！ も、力を抜いて……」

「ゴロちゃん、ダメーっ！」

俺はハツとした。顔の回りに漂つていた墨汁の雲が、海水と混ざつて、かなり薄まつっていた。タコは一本の脚を俺の後頭部に回して、無数の吸盤を俺の皮膚に吸い付かせて、といつか刺して、俺の頭をカラストンビに引き寄せようとしていた。と、腕に吸い付いている吸盤を剥がすビリビリつちゅう感触が、ハサミを通して中の筋肉に伝わってきたんだ。このタコは全部の脚を使って、俺の頭に巻き付こうとしてたんだ。やべえ！

「ゴロー、ちゃん！」

タコがハサミから完全に離れた。タコ足を後頭部から引きはがそ
うとムナしい努力をしていた俺は、このとき完全に打つ手がなくな
った。タコと顔の間に手を突っ込むこともできねえ。まつ黒く輝く
カラストンビが、俺の顔めがけてすつ飛んでくる。タコは弾いた輪
ゴムみたいに、びゅんつて音立てて俺の顔に巻き付いた。そしたら、

「ローラー ああああん！」

カラストンビが俺の顔面を捉える瞬間、エビ姫の奴が俺とタコの
間に飛び込んできたんだ。巨大なトンビはエビ姫に喰らいついて、
メキヤリていう何とも嫌な音を立てた。脱皮してまだ柔らかいエビ
姫の頭が、手のつけられないひしゃげ方をした。俺の目の前でだ。
タコは姫に噛みついたまま、強力な腕で俺の頭を包み込んだ。で、
そのままギリギリと締め込みだした。なんか意識が遠のいてくのが
わかつたよ。ああ、俺の人生、終わつた。

「ああ……「ローラー、ちゃん……」

「お前……」この状態でこんな会話はできっこないが、まあ、何ら
かの形で似たようなトークが行われたと思つてくれ。

「「めんなさい、あたしがこんなところに連れてきたばっかりに……」

「……」

「あたしはもうダメ。頭を割られてしまつたわ……。金田一族も、
もう解散。ここにタコに食べられて、空しい一生を終えるんだわ……」

「……」

「空しいもんか。お前は戦つただる。食物連鎖のピラミッドに革命
を起こすとかいって、まあ無理に決まつてんだけどさ、伊勢エビの
歴史の中で、お前は間違いなく最高の女傑だったる」

「ありが……とう。自然の摂……理に逆らおつ……なんて、無謀だ
つたのね……ふふ」

「ハビ姫！ おい！ もうヤツケクソ。」

「…………あたしの本業の名前はアリス…………」

「あくまで本物の本だ。」

「エビ子！！」

タロがすべて

夕子がすべての脚を使って俺の頭を締め上げた。そしたらな、顔面に押しつけられたエビ子の口が、静かに、否応なく、俺の唇と合わさった。運命のファーストキス。

卷之三

このまんまの会話をしたわけじゃねえよ、もう一度言つとくけど。

俺はベッドの中で目を覚ました。びっしょり汗をかいてたよ。部屋の中は真っ暗闇。目覚まし時計の蛍光インクが、コチコチと午前三時を指していた。夢か。夢だったのか……。夢以外にあり得ねえよな。で、体を起こしそうとして、俺は体中に痛みを感じたんだ。そして寝間着を捲つて驚いた。腕に、いや腕だけじゃない、首にも、顔にも、背中にも、あるいは吸盤のあとが、あつた……。

今年の夏休み、俺がブールに行かなかつた理由は、これだ。

俺は今、海岸通りのガードレールにもたれて、缶コーヒーを飲んでいる。夏だがホットだ。それ以外にはあり得ない。見ろよ、夕日が伊勢湾に沈もうとしてる。いや紀伊半島が見えるから、正確には伊勢湾に沈むんじゃないけどさ。海面はもう黒々として、その下に何かあるなんて嘘としか思えねーだろ。思えねえよな。そうさ、あんの下のどこかに西セントレアがあつて、あのおぞましいタコがいて、エビ子が、エビ子がいたなんて……。嘘としか思えないよな。

さて、缶エビーを飲み終わつた。そしたらやることほ一つだ。
海に向かつて空き缶を振りかぶる。磯の向こうまで届くかな？ 海
底の斜面を転がり下つて、エビ子のところまで届くかな？

なあんて思つたが、そんなガキっぽい想像はやめにした。投げるのもやめ。海を汚すだけだ。おい、『吾郎は力なく腕を降ろし、自然と出た溜息に田を瞑つた』なんて書いてあっても信じるなよ。絶対にだぞ。

俺は、自転車の籠に、飲み干した空き缶を投げ込む。あくまでも無造作に。

そして灼きつける夕田を背に、自転車をゆっくり漕ぎだすんだ。溶けかけたタイヤがアスファルトに粘りついて、べべべつて音だけがあとに残る。青春つて、そういうもんだる。な。

(ア)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9663f/>

勇者と姫のショートストーリー ザ 異世界

2010年10月8日15時32分発行